

貴方の為に私は

カツ丼親子丼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いじめを受け続けた一夏（女）は第二回モンドグロッソで
時空間ゲートに飲み込まれてNARUTOの世界に！？

一夏は自分の道を見つける

インフィニット・ストラトス×BORUTO NARUTO NEXT GENERATIONS

の二次創作です

ほかの作品も引き続き書いていきますのでよろしくお願ひします

目次

設定	8
プロローグ、そして忍びの世界で	1
心の拠り所	
目指す力と道	
チームワーク	
新たな任務、出会い	
新たな戦いの火蓋	
医療忍者	
真意	
	15
	26
	34
	50
	61
	71
	80

設定

性別	女性
年齢	8歳→15歳
親族	織斑千冬 木ノ葉の里での親族 綱手
好きな物	鰯の味噌煮 天ぷら
嫌いな物	わさび 唐辛子
姿	千冬を柔らかくした感じ、胸が大きい
髪型	ストレートからミディアム ウエーブパーマ（自分の居た時の世界ではお尻の上くらいまであつたが綱手から短い方がいいと言われて短くなつた）
服装	綱手と同じ服装 色が上が濃い赤、下が濃い青
忍術	医療忍術 白豪の術 忍法・創造再生

格闘系の技（空手、柔道、総合格闘技など）

本作の主人公、兼ヒロイン、毎日のクラスメイトや先生方や兄弟からのいじめを受けながら生活していた、体の至る所に傷や火傷跡がある。数人の友達が助けてくれていたが、さらにいじめが加速した。そんな時にモンド・グロツソ 第二回がありドイツでイチカと春斗は拉致監禁され兄の春斗だけが助かりイチカは助けにも来ない姉の千冬に憎悪を抱いた、その時に時空忍術の空間に飲み込まれてNARUTOの世界に、八代目火影 うちはサラダに助けられて綱手の元で育てられる。

綱手の元で医療忍術を学ぶ、綱手の亡き後サクラとシズネの元で修行する
綱手、サクラに格闘系を学び12歳で会得

シズネから薬などを学び会得

自身で改良型医療キット、手術キットを常時持ち歩いている

中忍試験の際に数人の他里の忍達から好意を持たれるようになるが一夏は気づ居て
いない、そして他里の影や上忍からは一目置かれている

料理はできるが見た目がよく、味が壊滅的

織斑の苗字が嫌いで苗字を変えている

現在の階級 木ノ葉隠れの里 中忍

担当上忍 （元）伊豆野 ワサビ

ワサビ班メンバー（オリジナルキャラ）第7班

紫吹 イチカ 四仲 クウガ うちは コウガ

班メンバー設定（オリジナルキャラ）

四仲 クウガ（しちゅう クウガ）

性別 男

年齢 11歳→16歳

好きな物 おでん ハンバーーガー

嫌いな食べ物 匂いの濃い物（例）カレーなど

姿 赤司征十郎の黒髪 目はさらに細く睨み目、

メガネかけた姿

髪型 ちるらん 新撰組鎮魂歌の土方歳三

服装 デニム着物（黒）右袖がない

忍術 主に水遁、土遁（血縁限界 木遁）

武器 ちるらん 原田左之助が使う 槍鎌

イチカの班メンバー、何事にも冷静だが強い敵との戦いになると冷静を無くし突撃し戦う、いつもコウガと競い合つたり、ケンカしている為イチカとワサビを困らせてている。

木遁を師であるヤマト隊長から教わる。イチカから貰ったシユシユで髪をまとめている。

暗部の父から槍鎌を教わり、使っている。
イチカに好意を寄せているが告白はしていないが怪我をし寝ているイチカにキスをしている

現在の階級 木ノ葉の隠れの里 中忍
担当上忍 (元) 伊豆野ワサビ

うちはコウガ

性別 男

年齢 11歳→16歳

好きな物 ラーメン

嫌いな物 野菜全般

姿 髮型 別世界のナルト(メンマ) 黒髪 髮なし

背中にうちはの家紋が刺青で入っている

服装 ペルソナ5 学生服の上 下がニッカポツカ 全体が黒、ボタンが無く開いた状態、黒のタンクトップを着ている。校章が無く背中にうちはの家紋がある

忍術 火遁 写輪眼（須佐之男の色 茶色 武器 盾）

イチカの班メンバー、サスケやサラダとは違い木ノ葉の里で生まれた訳では無い、木ノ葉の里から離れた小さい村の出身、サラダ達第7班が立ち寄った際にサラダ達と出会う、その後木ノ葉の里に行きイチカ達との班になる。うちはサラダを師匠に修業を欠かさずしている。中忍試験の際にイチカがやられたのを目の当たりし写輪眼を開眼、16歳の時に万華鏡写輪眼を開眼、性格はナルトに近く何があろうとも突っ走る。それでも、絶対に仲間を守り抜く正義感や母性は班メンバーの中でダントツいつもクウガと競い合つたり喧嘩をしている

料理の腕は中々のものである

イチカに好意を持つている。告白はしてないが中忍試験の際に「イチカの傍で寄り添つて生きていきたい」とイチカの目の前で言つた

伊豆野ワサビ

BORUTOのアニメオリジナルキャラクター

作者自身のBORUTOの中で好きなキャラTOP5に入るキャラクター
アニメの姿をそのままに身長が150cmから175cm

でスレンダーな女性になつている

階級 木ノ葉隠れの里 上忍

イチカ、クウガ、コウガの担当上忍（元）

本作ではチラチラ出てくる感じです。

申し訳ないです。

木ノ葉の里のメンバー

身長は変わっていますが他が変わつていません

インフィニットストラトスのメンバー

アンチとして千冬、オリ兄、筈です。

鈴はイチカが居なくなつてずっと中国の情報網でずっと探している。イチカの一番の友達である

性格も変わりなしです。

残りのメンバーも変わりなしです。

ただ、さらにアンチを増やすか悩んでます。

ストーリー展開や今後

今作はBORUTO—ボルト— NARUTO NEXT GENERATION
Sの漫画やアニメの10年後くらいを想定としたお話であり、一部ネタバレが色々と詰め込まれています。さらに今作の五影は一部オリジナルを入れています。こんなのがN

A R U T O ジャンヌやネタバレが嫌だと思う方はどうぞ、プラウザバツクしてください
それでも見たいという方だけでもよろしいので、お願ひ致します。今後の展開でまた
キャラ紹介をしたいと思つています

オリジナルキャラも沢山登場予定です

その中で展開を今回の設定で書いていますが、それも今後の展開に突つ込みます体以
上です。

I Sでの戦いなどはイチカ達は量産機で戦うと今のところは考えて
もしイチカに専用機を、と思う方はメッセージでお願いします。

プロローグ、そして忍びの世界で

私は一体何なのか？

いつも考えさせられる。

織斑一夏 7歳 姉と兄がいる

「私って一体何？」

毎日毎日、姉や兄に比べられて来る日も来る日もおかしくなる

学校では兄の下僕、姉の信者に虐められている

それだけじゃない、先生ですら私の味方ではない。味方となってくれる人は少なからずいるけども、私はいつも拒否を続けている。理由は簡単だ

巻き込みたくなかつたそれだけ

姉も姉で私を妹ですら見ていない、目を見ればわかる。

蔑んだ目がいつもある

姉からは「お前は本当に何ができるんだ？」それを言われた。

兄からは罵倒と体への攻撃、他にもあつた

それだけじゃない、姉や兄がご飯を食べても私にはそれがない

普通の生活つて何？

毎回毎回、それを思い知らされる
いつその事、死にたいと思つた。

でも、死ねなかつた

テレビで見た自殺の仕方を見て真似た、リストカットをした事もある。その時は友達
が見つけ一命を取り留めた

なら次はと部屋で首を吊つて死のうとしても、お隣の私にやさしくしてくれていた奥
さんに助けられた。

その時も姉や兄は私を罵倒した

「お前は何をしているのだ、人様の迷惑になるな!!」

その瞬間、姉に頬を叩かれた

「ごめんなさい」小さく謝つた

本当にそうだ、死ねないならどうしたらいいのか色んなことを考えた

そんな時に涙を流した

心の中で（なんで？）と思つたけど、そういうものだと感じ思いつきり泣いた

それからも変わらないと思つていたら『 I S インフィニット・ストラトス 』の

登場でさらに私の立場、居場所は無くなつた。

篠ノ之東の性でと思つたけど、その怒りも無くなつた。

怒りに任せたところで何も変わらない。

東さんからも「なんで怒らないのなんですか？」そんな事を言われた。

その時に私は

「怒つたところで何も変わらない」

「・・・」

「東さんがしたかつたそれだけでしょ」

東さんに笑顔で答えた

「ごめんなさい、ごめんなさい」

東さんは涙を流しながら謝り続けた

その後、東さんは465個のＩＳコアを世に放ち姿を眩ませた

私にとつて一番したってくれていた人が消えたことで心に穴が空いた気がした
それでも生活は変わらない、そう変わらない

そんなことがあるはずもなく、姉がモンド・グロツソの優勝

立場、居場所はさらに狂つたようにおかしくなつた

いじめはさらに激化し、私を守つてくれた人達も少なくなつた、それでも良かつた

なんで？ それは私だけでいい、傷つくことは

一年後、8歳になつたそんな時に第二回モンド・グロッソがあつた

私は黒ずくめの人達に連れ去られた。

目を開けるとそこはオレンジの豆電球で照らされた暗い部屋に鉄パイプに鎖で繋が

れていた

「おい、男の方は逃げたそうだぞ!!」

「どうする」

「まだだ、織斑千冬の妹がいる。こいつを人質であることは織斑千冬は辞退せざるおえないということだ」

「そうだな」ヘラヘラ

「おい!!織斑千冬が出場してるので!!」

「なに!?」

私は目を細めて見た、心の中でやつぱりな

と思つた

姉は私の事なんてどうでもいいと思つていると持つていたから

「ねえ、もういいでしょ殺して」

男達は後ろを向いて驚いていた

「こんな人質いた所で何も変わらないでしょ」

「殺してズラかる方が手つ取り早いと思うけど？」

笑いながら言った

多分、その時は私は狂っていたと思う、本当に

「いいんだな」

「こんな世界に未練もクソもないよ」

そう言つて目をつぶつた

その瞬間、私の後ろに黒い渦のようなゲートが現れたのだ
「なんだ!!」

そして私はその中に引きずり込まれて行つたのだつた

「どうする？」

「どうもこうもない、ズラかるぞ」

そう言つて男達はその場から逃げたのだつた

その後にドイツ軍が一夏が囚われていた倉庫に現れたがもぬけの殻だつた

私が次に目を開けたのは、風の感覚で目を開けた

そこは巨大な枯れた大木がそびえる場所、落下しながら落ちていた

「何!?

私は固まっている体を動かそうと思っていたが動かず何も出来なかつた
その瞬間、落下する勢いが止まり空中で逆さの状態で止まつていたのだつた

「一体何?」

「うずまきボルトと同じ力、いやまた違つた力を持つものよ」
「え?」

そこには私の目の前に角の生えた、源義経に似た服を着た、肌が白い男か女か分から
ない人物がいた

一夏は声を出そうとしたが出せなかつた

「これから起ることに背を向けず抗い続けよ、さすれば道は開く」

そう言つた瞬間、私はまた落下を始めた

「うわあーーーー!!」

そしてまた同じような渦の中に入り気を失つた

「世界の渦が更に別の次元の者を呼び寄せたか」

「混沌はまさに濃くなるばかりか」

その者は背を向けて、そして体が薄くなり消えたのだつた

そして一夏が倒れた場所では

「次元の裂け目の感覚がして来てみれば、これはなんだつてばさ」

男が周囲を見回しても何も無くなっていた、一面森だつたはずだが
そこの中に傷ついた女の子（一夏）が倒れていただけだつた

心の拠り所

忍びの里、木ノ葉隠れの里

昔、九尾の狐によつて木ノ葉隠れの里は壊滅の危機に陥るところで、四代目火影が命を通じてそれを自身の子に封印した、それからも木ノ葉の里が壊滅の危機に陥りかけた時に九尾の狐を封印された者が木の葉を守り、第四次忍界大戦でも忍達の前に立ち戦い勝つた者、その名は七代目火影 うずまきナルトである

「ぐう」　ｚｚｚ

「寝るな」　本で頭を叩く

「痛い!!」

「私が木ノ葉の里の火影について話してゐるのに」

「歴史の勉強なんて戦いにいらぬでしょ」

「木ノ葉隠れの里の忍になるのだから覚えておきなさい、コウガ」

男は変な顔で女性の方を見た

「ここにはコウガと名乗る男と羽織を着た女性が一人が、いるだけだった

「もういいから、修行を付けてくれよ サラダさん」

「生意気言わない、まだまだ勉強してからよ」

「えええええ」

「ほら、やるわよ」

コウガは渋々、本を開いた時だつた

「八代目!!」

扉の方で声がしてサラダとコウガは向いた

「どうしたの? なみだ?」

そこには雀乃なみだが息を切らして言つて來たのだつた

「八代目、ボルト君から火急の報せの鷹が來たの」

「ボルトさん、帰つてくるの!!」

「コウガ、落ち着きなさい」

コウガの飛び付かないように話を遮る

「分かったわ、火影室で聞きます」

火影室

「シカダイ、ボルトからの報せつて?」

「火の国と雨の国の境目の近くで、調査中、時空間忍術だと思しき感覚があり、行つてみたら森一面の場所が開けた状態になつており、真ん中で女の子が倒れてたらしい」

「今その子は？」

「ボルトが急ぎ、木ノ葉に連れてきてるらしい、かなりの重症らしい」

「分かつたわ、母さんに・・・」

言おうとしたが

「そうだつた、母さんは任務中で風の国だつた」

「綱手様に要請しようか？」

「お願ひ、急ぎで」「分かつた」

そう言つて、シカダイは火影室を後にした

シカダイが居なくなつた後

「また何かの前触れ？」

サラダは窓際に立ち復興中の木ノ葉の里を見た

ボルトのお陰や色んな人のお陰で、ここまで復興できたのだつた

「もし次があるなら絶対に阻止する」

そう言つて自分も木ノ葉の門に向かつたのだつた

あんの門の前

5人の人影があつた

「綱手様、申し訳ないです」「いいんだよ」

笑いながらサラダに言つた

「もうすぐボルトが着くらしい」「分かったわ、てか何で居るのコウガ」
「ボルトさんと喋りたいから」

「そんな状況じやないの」

頭を抱えてため息をついた

「あつ!? ボルトさんだ!!」

抱えていた頭を門の方に向けた時

サラダは目を見開いてしまつた

サスケと同じ服装だったからだ

サラダは頭を横に振り

もう一度見た時にボルトに変わっていた

「ボルト!!」

「すまねえ、綱手のばあちゃん」

そう言つておんぶしていた女の子を綱手に渡した

「直ぐに治療に入るよ」

そう言つて綱手は女の子を抱えて病院に向かつた

「何があつたの?」「火影室で話す」

「早く行くぞ」

「何があったの？」

真剣な顔で火影椅子に座つてボルトを見た

「殻のアジトの調査、所在を調べてた途中に楔（カーマ）が反応して、そこに行つたらあの子が倒れていた」

ボルトはサラダに、事の顛末を話したのだつた

「あの子が何者かも分からぬのに？」

「楔（カーマ）が反応したという事は、カワキと同じかそれとは別の何か」

「そう言つて、背中にあるショルダーバックから巻物を出した

「今回の件はまた別な気がしたから連れてきただけだ」「・・・」

サラダはボルトを見た後、ため息をついて

「分かつた、所在なんかはこつちで確認するわ」

「わりいな」「いいから」

巻物を受け取り、シカダイに渡して

ボルトとサラダは病院に向かつた

「そう言えば、コウガは?」「あれ?」

辺りを見たが、居なかつた

ボルトとサラダが病院に着いた時に、綱手も出てきたところだつた

「綱手様、あの子の様子は？」

「サラダか？ 酷いもんだねえ」

「何が？」

「体を調べたけど、爆弾の類はない」

それを言つた後

「ただし、体の至る所に火傷跡、切り傷、打撲が沢山あつた」

それを聞いたサラダは

「酷い」

「それだけじやない、食事なんかも取れてなかつたのか、栄養失調手前に首に痣があつた」

「歩きながら救急治療室で眠る女の子の近くまで行つた
「多分、自殺しようとした痕跡が沢山あつたよ」

「何があの子をそこまで」

「辛い環境にいたんだろうねえ」

救急治療室のガラス前にコウガが女の子を見ていた

「コウガ」「ボルトさん」

「どうしてここに?」

「分からないけど、何故かあの子助けたいって思つてしまつて」

「ふーん、お前にも春が来たつて事だつてばさ」

コウガは変な顔になり、ボルトを見た

「なんだつてばさ」

ボルトはコウガの頭をわしやわしやとして笑つた

「うわあー!!」

ボルトに遊ばれるコウガは恥ずかしがつた

「病院では静かにしろ」

2人の頭を殴つた

「すいません(だつてばさ)」「はあ」

サラダはため息を着いた

「綱手様、あの子いつ目が覚めますかね?」「あの子次第だよ」

それから2日たつた

「う・・・ん」

一夏は目を開け辺りを見たが

白い天井、綺麗な空、カーテンで仕切られた場所

「ここは？」

起き上がるとしても、体が言う事を効かなかつた

「起きたかい？」

一夏は声がした方向を見たら

額に星の印をした30代の女の人がいた

「貴方は？」

「私かい、私は綱手という者だ」

「綱手さん」

「綱手でいいよ」

一夏は呼び捨てにするのが苦手で、苦虫を噛み潰したような顔になつた

「ここは一体どこですか」「ここは木ノ葉隠れの里だよ」

一夏は聞いたことがなく、難しい顔になつた

「混乱があるようだね、今は休みな」

そう言られて、一夏は目をつぶつた

「直ぐに火影とボルトを呼んできな」「はい!!」

看護婦は言われて直ぐに向かつた

直ぐにボルトとサラダは現れた

「綱手ばあちゃん、あの子が起きたつて本当か?」

「今は少し眠ってるがな」

一夏は声がし起きた「起きます」

一夏は目を開けて言つた

「話せるかい?」「はい」

そう言つて一夏は苦しくても起き上がつた

「質問をいくつかしたいのだけど?」「大丈夫です」

「もし苦しかつたらその場で中止だよ」

「分かつてます」

そう言つて、サラダは一夏の方を見た

「最初に貴方の名前を聞いてもいい?」

「一夏です。上の名前は嫌いで教えたくないです」

「大丈夫よ、イチカさんでいいかしら」「はい」

「私はうちはサラダ、この木ノ葉隠れの里の長、火影をしてる者よ」

「火影?」

「そう、貴方はここにいるボルトの救助されてここに居るの」

サラダはボルトを指さした

「はああ」

「多分、ここは貴方がいた場所とは違う場所だと思うの？」

「多分、そうだと思います。火影って聞いた事が無いです」

「やつぱり」

「イチカとやら、お前の国はどんな国だ」「え・・・」

「貴方の国はどういう所なの？」

「男と女の立場が逆転した世界です」

一夏は自分の世界を話し始めた

「I S インフィニットストラatos、と呼ばれる女性しか操れない物が登場して、男の立場が逆転したんです。私の姉もその機械を操り大会で優勝しました、私は姉や兄の様に器用にできず、いつも虐められていました。そんな時に私は死んでしまおうと思いました。」

一夏は自分の手首をさすつた

「あの世界に私は何も無い、自分とは一体何なのか分からなくなつて死のうと思いましたが、色々な人に助けられて死ねませんでした。」

一夏は言葉を淡々と話して行く内に、涙を流しながら話した

「そしたら、姉や兄に裏切られてやつと死ねると思つたら、ここに居る感じです」
涙を拭いて笑つた

その瞬間、綱手に抱きしめられた

「もういいよ、もういいんだよ」

抱きしめながら頭を撫でた

一夏はその行為をされるのが初めてで

「サラダ、この子は何も悪くないよ」「ですね」

「この子は私が預かる、いいかい?」

「分かりました、この事は上層部に私から伝えます」

ボルトイいかい?

「その方がいいつてばさ」イチカ、今からお前は私の子だよ」

目指す力と道

あれから一週間たつた

私の体は動くのすら難しかったのが、ゆっくり歩けるまで回復した。

歩けるようになり、退院して綱手様と一緒に綱手様が住まう家に向かつた
それだけでは無い、綱手様との親子関係になつたが、なんと綱手様は80のおばあ
ちゃんと知り驚いた

だつて30～40位にしか見えなかつたのだ

それを綱手様に言うと

「嬉しいねえ」

と言い、照れていた

そして、家に着き綱手様が扉を開いた

「帰つたぞ、シズネ」「お帰りなさいです、綱手様」

「うむ、それと」

綱手様は私を前に押した

「シズネ、今日から私の娘になつたイチカだ」「一夏です」

そう言つて、お辞儀した

「話は八代目から聞いてます」

シズネはイチカの方を向き

「初めまして、シズネと申します。綱手様の弟子権、右腕のような存在です」

「一様、綱手様と同じで医療忍者です」

笑いながらイチカを見た

「初めまして、よろしくお願ひします」

一夏はお辞儀をした

「そこまでにして、飯だ!!」

そう言つて、綱手様は居間に向かつた

「今日はお酒とかは無しですからね」

「イチカと私の親子関係を祝うのに酒がないとはなんだ」

シズネと綱手の言い争いに一夏は

「ふふふ」

笑たのだった

そんな時に綱手様が

「何をしてるんだ?」ここはイチカ、お前の家だぞ」

そう言われて、目を見開いて一夏は戸惑つた

「おかえり」

「一夏はさらに嬉しくなつた、初めての言葉だつたからだ
「ただいま」

照れながら言い中に入つたのだつた

それからのイチカは綱手様から貰つた薬と軟膏を使い体の傷跡が良くなつた

家事を手伝つた、掃除だつたり洗濯もだ

ただ、食事に関してはやらせてくれなかつた

理由は知つてゐる、一度作つたことがあつたが

綱手様とシズネさんが食べ終わつた後、倒れたのだつた。その後、綱手様の弟子のサ

クラさんに救助を頼み2人はなんとか一命を取り留めた

綱手様とシズネさんに私は何度も何度も謝つたのだつた

そんな事もあり、イチカはシズネさんと一緒に食器洗いをしていた時に

「シズネさん、私医療忍者になりたい」「え・・・」

シズネはイチカの方を振り向きイチカを見た

「何故なりたいのか聞きててもいい?」

「綱手様のお陰でここまで体が良くなつたし、私に家族をくれたから、なら次は私が色んな人を守りたいって思つて」

恥ずかしそうに笑いながら言つた

そんなイチカを見てシズネは微笑みながら心の中で、（良かつた）と思つたのだつた
「分かつたわ、この事は綱手様にも伝えておくから、もし綱手様が了承したらビシビシ鍛
えてあげる」

「頑張ります」

2人で笑いながらそんな話をした

イチカが自分の部屋で眠つた後

「綱手様、少しよろしいでしようか？」

「どうしたそんな改まつて？」

「イチカが医療忍者になりたいそうです」

「!」「イチカに理由を聞いたら」

イチカが話した事をシズネは綱手に話した

「そうかい」

そう言つて、湯呑みに手をかけて茶を啜つた

「分かつたよ、私が教えるよ」

そう言つて、シズネに言つた

「分かりました、この事はイチカにも話します」

そして、イチカが医療忍者になることが決まつたのだった
それからは綱手様とサクラさんが一緒になつて
イチカに医療忍術を教えた

最初こそチャクラが使えず時間をかけたが

チャクラを使いこなし、忍者としての修行であつたり、体術の練習をこなした
シズネさんからは薬などの薬物の勉強、朝昼晩と勉強した

他にも、木ノ葉隠れの里の勉強（歴史など）を勉強し一人前になる為に勉強した
最初は折れそうになつたが我慢と辛抱と努力を積み重ねて物にした。それこそ死に
かける場面もあつたのだった

それから、2年がたちイチカは10歳の誕生日を迎えた時には、医療忍者としての色々
なものを叩き込まれ立派になつたが、そんな時に綱手様が倒れたのだった

イチカは綱手様を直してと縋る思いでサクラさんに言つたが

「サクラさん、綱手様・・・母さんを助けてください」

涙を流しながら言つた

「ごめんなさい、師匠の病気は今の技術では無理なの」

「イチカ・・・」

「その場で涙を流した

「助けてください、助けてください・・・」

イチカは座り込み神様にねがうように「助けてください」をずっと言い続けたのだった

それから、イチカはベットで眠る母さん（綱手）の手を摩つた

それに気づいたのか綱手は目を覚ました

「撲つたいよ」「母さん、死なないよね？」

「これは自然の摂理だよ」

「私はこれからどうしたらいいの？」

「大丈夫だよ、医療忍者としての基礎や大切な事は教えた」

綱手はイチカの頭を撫でて続けた

「後の事は、サクラやシズネが居る。そしてこれからはイチカ、お前がこれからをになつて行くんだよ」

「私が?」「そうだよ」

「母さんがいたからここまで出来たけど」

「くよくよしない!!イチカ、お前が次の患者や仲間を守るんだよ」

イチカはそう言われて泣きそうになつた顔を拭い

強い目で綱手を見たのだつた

「分かつた、私頑張るね」

そう言つて2人で笑つた、そして2日後に綱手様は亡くなつた。

イチカは涙を流さず、箱の中で眠る綱手を見て

「これからは私が母さん以上の医療忍者になつてみせるから上で見ててね」

そう言つて、花を添えたのだつた

イチカは一層に医療忍者としての勉強をして行つた、綱手様の教えやサクラさんの教え、シズネさんの教えを昼夜問わず、ノートに書いたり実践していった。

そんな中で、イチカは髪を切つた。お尻まであつた髪をバツサリ切つてミディアムウエーブパーマにした。それを見たシズネが何で?と聞くと

「母さんから切つた方がいいって、言われたけど着る時間が無くて、今しかないと思つて
切つたの」

髪を触りながら言つた

そして服装も綱手寄りの服装になつた

イチカ曰く、「母さん見たいになりたいから」であつた

そして、12歳となり
イチカは推薦枠で第7班のメンバーになつたのだつた。

チームワーク

私は今、アカデミーの廊下をサクラさんと一緒に歩いていた

「サクラさん、今からどこに行くんですか？」

「イチカ、貴方は木ノ葉隠れの里が忍者の里であることは分かつてゐるわよね？」

「はい」

イチカはサクラが言いたい事が、分かつた気がした

「私も忍として働くといけない」と云った

「そう、でも最初は三人一組の下忍から始まるの」

「三人一組？」

「今向かつてる所は、貴方を入れて後二人が待つてるわ」「・・・」

「そして、それを教える先生も」

そして、サクラさんの足が止まつた

「ここよ」

そう言つて、私は目の前の扉を見た

「私はここまで後は自分で考え行動する」

サクラは笑顔でイチカを見た

そして、抱きしめた

「あなたなら大丈夫」「ありがと、頑張る」

そう言つて、イチカは教室の扉を開いたのだつた

「来たよね」「えつと」

イチカは机の椅子に座る二人と壇上に一人いた

「まあ、座つて」

笑つて言つた、イチカはそれを聞き座つた

「それじやあ、挨拶がてら自己紹介と目標とかしようか」

周りはシーンとなつた

「あれ?」「先生からしたら?」

「そうね、なら」

「私の名前は伊豆野ワサビよ好きな物、嫌いな物は色々、以上」

「なんもわからんねえ」「分からなくていいの」

そう言つて、ワサビは他の子を見た

「まあ、あなた達の担当上忍だからよろしくね」

「じゃあ、男の子から」

指を刺された子がため息を着いた

「四仲 クウガ 好きな物、嫌いな物はない 目標は絶対的な強さのみだ」

クウガが言つた後、目を瞑り顔を伏せた

「そうかそうか、分かったありがと」

先生はそういう次の人に言つた

「俺の名前はうちはコウガ、好きな物はラーメンで嫌いな物は野菜全般、目標はサラダさんがいる火影かな」

笑いながら先生に言つた

「貴様みたいなのがなれる訳がないだろ」

クウガはコウガの言葉を否定した

「なんだと」 イラッ

クウガの方を見た

「そこまでよ」

先生が言葉を遮つた

「それじゃあ、紅一点である女の子の自己紹介お願ひ」

笑いながら言つた

「えっと、紫吹イチカです」

立つてお辞儀した

「好きな物は鰯の味噌煮と天ぷら」

淡々と話していく

「嫌いな物はわさびと唐辛子が苦手です。目標は母やサクラさん、シズネさんの様な医療忍者を目指しています」

照れながら言つた

「いい目標だね」

イチカが座り、ワサビが話し始めた

「これからはこの4人で任務を遂行していくからよろしくね」

「そして明日は三人の実力を試したいから朝ご飯食べずに第3演習場に9時に集合ね、それじゃあ解散

ワサビはそう言うと印を結び煙が出て消えた

イチカも教室を出ようとした時に

「お前、あの時にボルトさんが連れてきた女の子だよな」

「え・・・」

イチカは振り向きコウガを見た

「そつか、お前気絶してたから知らないんだつたな」

「えつと」「これからよろしくな」

コウガはイチカに握手を求めた

イチカもそれに応えて握手した

「そこ退いてくれるか」「ごめんなさい」

イチカは謝り退いた

「お前、あの時何言いやがった」

クウガはコウガを見た

「お前みたいな奴が火影に慣れるとでも思つてゐるのか」

「なんだと」

コウガはクウガの胸ぐらを掴んだ

「そんな態度の奴が上を総べる事が出来るかよ」

クウガはコウガの手を退かし教室を出た

「なんだよアイツ」「ダメだよ、喧嘩とかは」

「知るかよ、アイツが言い出して喧嘩吹つかけて来ただけだろ」

「これからチームになるんだから、喧嘩はよしてよね」

イチカも言つて教室を出た

「はいはい」

こうしてワサビ班最初の出会いであつた

火影室

「中々、骨の折れる子達ばっかり」

「そうでしようね」

「お前に任せた方が、色々と理にかなつていただけだ」

「はあ」

「1人は暗部のサイさんから次世代の暗部候補の一人の推薦」

「そしてアカデミー卒業と火影様からの推薦が一人」

「後は」

サラダは手元にある書類を見た

「異世界から来た女の子」

「はあ、異次元すぎる気がするわ」

「今回は異例であり、新たなシステムの導入だから我慢してね」

サラダはワサビに詫びる形で言つた

「大丈夫、明日は力量調べるためにあれやるわ」

「あれかゝ懷かしいわね」

そう言つて、話が進んでいくのだつた

「ご飯いいの？」

「今日はご飯抜いて、第3演習場に9時に集合だから我慢する」

「あまり無理しないでね」「大丈夫」

着替えを終え、仏壇に手を合わせた

そして目を瞑り、目を開けた「行ってきます、母さん」

そう言つて、靴を履き家を出た

第3演習場では、2人とも着いており、私が来た後に先生も來た

「早いわね」「おはようございます、ワサビ先生」

お辞儀をした

「おはよう」

そう言つた後、丸谷にタイマーを設置した

「OK」「なんですかそれ」

タイマーを指さした

「制限時間つて奴」

「そう言つて、三人の方に向く

「これから、私対あなた達で訓練をする」

「え・・」「まあ、鈴取り合戦」

三つの鈴を見せた

「これを三人で取りに来る」

「簡単じやん」

「言つとくけど、私も本気で相手するから」「嘘でしょ」

「これはチームワークを大切にする為の訓練」

「バラバラだと誰かが死ぬから?」

「そういうこと、今回のリーダーはイチカ貴方がしなさい」

「俺じゃないの?」

「冷静沈着で場の判断ができる子がした方がいいから」

「うつ」「それじゃあ、始めるわよ」

そう言つて、ワサビはタイマーを押した

その瞬間、3人は隠れた

「えつと、よろしくお願ひします」

隠れた後、3人合流した

「どういう風に戦うんだ？」

「えつと、2人の武器だつたり術を教えてください」

コウガとクウガはイチカを見て自分が使える武器、術を教えた
「これでいいか？」「はい、では話していきます」

イチカは作戦を説明する

「まず、配置ですがコウガくんが前衛、クウガくんが中衛、私が後方で支援します」

「コウガくんが先生と戦いながら、隙をついてクウガが叩く、術での応戦もしていく形
で」

「了解だ」「何故、俺がこいつの後ろなんだ」

「クウガ君の武器、術で判断したのごめんなさい」

イチカは説明と謝罪をした

「いや言い、これで勝てるのか？」

「勝てるに決まってるだろ？」

「貴様に聞いていない」「なんだと」イラツ

「分からぬいけど五分五分かな」

「もし、こいつがヘマしたら俺が出るがいいか？」

「それはもちろん考へてる、コウガくんやクウガくんが怪我した場合とかは私が治すから」「了解した」

クウガはそう言つて、腰のバックから巻物を出し、開き武器と書かれた所に手を置た。そしたら煙とともに槍鎌が出てきた、イチカも目を瞑り、一呼吸したあと目を開けた。コウガは拳をならし笑つた。

「行くか?」「うん」「ああ」

「準備が出来たみたいだね」

三人が出てきて、そう感じとつた。ワサビ先生もフードを被り、印を結んだ

「忍法 猫かぶり」

その瞬間、フードから耳、お尻から三本の尻尾
手はチャクラでできた爪ができた

「先生も本気みたいだぜ」「行こう」

そう言つて、隊列を組んだ

「なるほど」

ワサビ先生も気づいた

コウガを先頭に隙を付いて鈴を狙う戦いだと

「それじゃあ行かさせてもらうぜ!!」

千手を取つたはコウガだつた、素早く印を結び
大きく息を吸つた、そして

「火遁 豪火球の術」

炎の玉をワサビ目掛けて放つた

「クウガくん!!」「分かつた」

クウガはイチカの声と同時に左へと周つた

「甘いよ」

ワサビ先生は豪火球の術をチャクラの爪で真つ二つに切り裂いた

(マジかよ)

「これでどうだ」

クウガは透かさず、槍鎌を槍状態でワサビ先生を狙つた

ワサビ先生は突く寸前で交わし続けた

「ならこれなら」

クウガは後ろにいるコウガにバトンを渡し、飛んだ

コウガは印を結び終え、術を放つた

「火遁 鳳仙花の術」「甘いよ」

コウガがニヤリとしたのを見たワサビ先生は火の中に手裏剣が混ざつてゐるのを見破つた。それをワサビは飛んで空中で身体をひねりそれを避けた

「ここ!!」

避けた所にイチカがおり、懷に拳を叩き込もうとした瞬間、尻尾で受け止めた

「嘘!?」「危なかつた」「まだだ」

イチカはクウガの言葉を聞き、ワサビ先生を立つたまま押させ混んだ

「何?!!」

クウガは印を結び術を使つた

「水遁 破奔流」（すいとん はほんりゅう）

手から竜巻状の水を作り、ワサビの懷めがけて放つた

ワサビは懷に放つて持つてきた腕を足で硬め、地面上に叩き込んで後ろにいるイチカを身体をひねり振り払つたそして、2人を爪で攻撃しようとしたが

コウガの手裏剣にワイマーが付いております体を縛らた

「くつ」

口にワイマーを持ち術を出した

「火遁 龍火の術」

火がワイマーを伝わりワサビ先生に当たつた

「やつたか?」

直ぐに、イチカとクウガも体制を建て直しコウガの近くによつた
「まだだと思う」

「これで、やれたら上忍は弱い奴らばっかりだ」

「でもよ、俺の術が当たつたんだぜ」「よく見て」

コウガは言われた通り、ワサビ先生のところを見ると丸太が倒れていただけだつた
「変わり身?!!」

「全員背中をあわせて!!」

イチカに言われ2人は三人で背中を合わせた

「どうする?」「待つて」

イチカは左右を見て、上を見て

(視界には居ないし気配を感じない)

イチカは回りを見たあと

「ならここだあ!!」

イチカはチャクラを拳にありつたけ纏わせて地面を殴り、殴った地面は思いつきりえ
ぐれた、それを見た2人は(マジかよ)(凄いな)

そして、地面の中に居たワサビ先生も(どんだけーー!!)

「先生みつけ」

笑いながら言った

直ぐに2人は先生に突撃を仕掛けた

クウガは槍から鎌に変えた

コウガもクナイを持ち、突撃した

それを見たイチカは突撃せず、隙を見せた先生にアタックをかける準備をした

「先生まだまだ行くぜ!!」

コウガは三つの手裏剣を投げた後、飛んでクナイを6個投げた

投げた瞬間、クナイと手裏剣が同時に当たり角度を変え続けて四方八方を固めた

ワサビ先生はそれを左腕を左右へと振りはじき飛ばしたが、地面ストレスまで屈めていたクウガの武器の攻撃に避けきれず、服を掠めて後ろにさがつた

そこにイチカの攻撃が入る。回し蹴りが入り、

それを掴みでカバーしたが、次に下からの攻撃かと思われたが、ワサビ先生は気付かず、イチカは下から鈴を狙つたのだつた

それに気付くのが遅れて避けようとしたが避けきれず、鈴を掴まれたその時

「ジリリリリリリリリリ」

演習場内でタイマーが鳴り響いた

「え・・・」

「ここまでだね」「クソ、あとちょっとだつたのに」

「・・・・・」

「みんな凄いね、私も少し本気になりかけたよ」

三人が啞然した

まだ上があるのかと

「まあ、今回は力量を図るためにやつたし、お昼は私が奢るからなんでも言つて」

「なら、ラーメンが食べたい」

「いいわねえ、そうしましよう」

そう言つて、2人は歩き始めた

クウガもそれに続きかけたが

「あ、待つて」

イチカに停められた

「なんだ?」

イチカは腰のポーチから小さいシユシユを出した

「髪の毛邪魔そうだし、これ使つて小さくても使い易いから」

イチカはシユシユを手渡して、2人の元に走り出した

「こんなのは初めてだな」

そう言って、髪をシユシユで束ねたのだつた

新たな任務、出会い

あの後はラーメンを食べてコミュニケーションを取った、全員優しい人達で私も良かつたと心から思つたのだつた

それからは任務が続いた。そんな時に

「もうやつてられるか!!」「うるさいぞ」

「なんだと!!」「うるさいと言つて何が悪い?」「あー」

コウガはクウガの胸ぐらを掴んだ

「そこまでにしてよ、火影様の前だよ」

2人は周りを見た

ワサビ先生はため息をつき、シカダイさんや任務担当者そして、火影であるサラダが

いた

「ごめんなさい」「すみません」

「いつも大変ね、ワサビ」

「こいつらが落ち着いてくれたらいいんだけど」

「そうだな、詰まらない任務ばかりでは嫌か?」

「シカダイさん、分かつてゐるなら言わないでください」

「そうだな」

シカダイは周りにある資料を読み漁り、こいつらにあつた任務を探す
「これなんか良さそうだな」

それをサラダに渡す

「そうね、ならこれを言つてもらおうかしら」

サラダはそれをワサビに渡した

「護衛任務ですか?」「護衛任務?」

「誰かを守ることですよね、一体」

「あなた達が守るのは、ある大名の次期当主よ」

「次期当主」「後は私から伝えるでも?」

「そうね、任せるわ」

「了解しました、火影様」

そう言つて4人はそこから出ていく

「難しい任務だけど行けるかしら」

「まあ、あいつらは今の班の中で飛び抜けているから大丈夫だろう」

「そうね、信じましよう」

「先生、任務の話を」

「そうだね、受け持つた任務について今から説明するわ」
出た後、イチカは任務の話をするように促した

「今回の任務は大名の一人であるテントウ様のご子息にして次期当主の護衛」

「言わば、その人守れってことだろ」

「頭パツパラパーのお前でも分かつたのか」「一言多いんだよ」

「だけど次期当主となると」

「そう、相当守らないと行けない」「難しい任務つて事ですか?」

「では、集合は明日の朝あんの門の前で」

「そう言つて、ワサビは別の方向に飛んでいつた

「俺も用事あるし、じゃあな」

コウガはイチカの肩を叩き飛んでいった

「私も帰るね」「待ってくれ」

イチカはクウガに止められた

「どうしたの?」「こ・・この間のお礼」

そう言つて、腰ポーチから可愛い紙袋を取り出した

「え・・・」「俺が使つてゐるから、新しいの買つたんだ」

「ありがとう」

笑顔で受け取り、中身を見た

クウガにあげたのは白のシユシユ、紙袋に入つていたのは薄ピンクのシユシユだつた
「可愛いありがとう」「良かつた」

そう言つて、クウガもイチカとは別方向に走り出したのだつた

「嬉しいなあ」

笑顔になりながら、家に帰宅したのだつた

「ただいま」「おかえりなさい」

「シズネさん、ただいま」

シズネさんに挨拶した後、仏壇に行き

「母さん、ただいま」

日課である、母さんに今日あつたことを話す

「今日ね、初めて異性からプレゼント貰つたんだよ」

それを見せる

「まあ、お返しでもらつたけど初めてで嬉しいなあ」

「そんな事があつたんですか」「ひやあ、シズネさん!!」

「嬉しい事は喜ばしい事ですね」「うん!!」

その後、台所に行き手洗いと食事の用意を手伝い
食事をした後、明日の用意をした

「医療器具セットと改良型医療セット、薬はちゃんとある」「
イチカ、これ持つていきなさい」

シズネさんに言われて見るとそこには、首飾りがあつた
「これは?」

「綱手様が昔七代目火影であるナルト君に、渡した首飾りです。ですが、尾獸化しかけた
時に首飾りがナルト君を抑え付けたのですが、首飾りを碎いてしまいましたね、綱手様
がそこから新たな首飾りを作つたのです。それをイチカ、貴方に渡すために」「
母さんが私に?」「これは、お守りでもあり愛ある代物です」

シズネは笑いながらイチカに渡した
イチカは貰った首飾りを首に着けた

「似合つてますか?」「よく似合つてますよ」

シズネが笑顔で答える

「えへへ」

照れながら、鏡を見に行つた

(これでよろしいですか？綱手様？)

シズネは仏壇にある綱手の写真を見たのだつた
別の場所では

「はあああああ！！」

「槍鎌を鎌状態で振り回し周りに生えた竹を鎌で切り裂いていた
「ハアハア」

「そこまでにしておけ」「父上」

そこにはクウガの父、四仲 リュウゲンがいた

「明日も早いであろう」「はい」

「身体を休めるのも修行の一つだ」

「分かっています」「ならば、休め」

「はい」「明日も私と母さんは任務だ」

「分かってます、私も任務で2週間出でていますので」

「そうか、母さんにも伝えて荷物などをまとめておけ」

「はい」

そう言つて、リュウゲンは自宅へ歩いていつた
クウガも歩く前に束ねていた髪を解き

シユシユを鼻の前まで持つていき目を瞑つた

「なんだろうなあ」

そして腰のポーチにしまい父の後をおつたのだつた

翌日あんの門前では三人が待つており、最後に来たのはイチカだつた
「ごめんなさい、遅くなりました」

「大丈夫だよ、予定通り」

「よし行くか」

「なぜお前が指揮る」

「誰だつていいだろ?」

「そうだね」

そして、木の葉の里を出たのだつた

「はえ」

「そう言えば、イチカは里を出るの初めてだつたね」

「はい」

恥ずかしがりながら、頭をかいだ

「私もそんな反応だつたよ、最初」

「ワサビ先生!?」「そらそうだよ」

「俺は外の人間だから余り感じないけどな」

「俺も、父上と一緒に外には何回か出ている」

「父上だってｗｗｗ」「殺されたいか蛆虫」

「やつてみろや」

いがみ合う2人をワサビ先生はため息を付いた

「2人ともこれからつて時に」

そして目的の場所に到着したのだつた

「お越しくださいました」

ワサビ「よく分かりましたね」

「旦那様は少し忍の修行と題し、手裏剣をやつて居られて感覚が研ぎ澄まされているのです」

「なるほど」

「私は執事のキシキと申します」

執事の方が深深と挨拶した

「では、旦那様のところに案内して貰えますか?」

「はい、ではこちらに」

執事に第7班はついて行く

「旦那様、木の葉の里の忍が来られました」

「来たか!?」

「初めまして、伊豆野ワサビです」

「私が大名の一人テントウです」

ワサビと旦那様は握手した

「そして、部下の3人です」

「私たちちはお辞儀をした

「私の息子の護衛で2週間、よろしいですか?」

「こちらは受けた任務ですから大丈夫ですよ」

「良かつた、息子は今事務作業をしております」

「私たちちはテントウ様に着いていく

「そして、目についたのが

「これは次の定例会で、これは何だ?」

「1人の男の人が周りを指揮していた

「よしそれじゃあ、これは私がやる」

「あの人ですか？」

「そうなんだけど、君達と歳は変わらないけど仕事熱心でね」「じゃあおじさんは何してるの？」

「大名をおじさん呼ばわりしない!!」

「いいよ、そうだね」

自分がしていることを話し始めた

「私は他の大名との会話だつたり、政策を考えたりかな」

「難しいことやつてるんだな」

「そうだね」

「それじゃあ、以上をもつて解散とする」

「そうい、固まつていた人達がはけていつた

「父上、お待たせしました」

「いいよ、こちらが木の葉の里の忍の方々」

「そして私の息子のシントウです」

「シントウです、よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

眼鏡をかけた、お父さんと違いかつこいい人だなつトイチカは思つた

「先生、これから仕事を」

「そうだね、それじゃあ私はテントウ様と話し合いしていくから」

ワサビ先生は三人を見た

「シントウ様を護衛始めてくれるかな」

「「了解」「」

「暗殺の準備は出来てるか?」

「俺たちを誰だと思ってる」

「ならば、行け」

第7班として初めての長期任務であり、激闘の任務になる事は今は誰も知りません

新たな戦いの火蓋

任務の一日目が終わり、自分達は宿舎となる部屋に通された

「今日は疲れたーー!!」

「何も無くよかつた」

クウガはイチカの方を見た

「そうだね」

イチカはキツチンに行き、お湯を沸かした

今日の疲れが出たのか、コウガはベットに寝つ転がつて

「明日も平和がいいや」

そういう事を言つた後、椅子に座るクウガがそれを否定した

「そんな訳あると思うか」

「俺は思うね」

「だから、脳みそパッパラパーなんだよ」

「もう一度、言つてみろよ。とつちやん坊や」

「はあ」

「殺るか？」

クウガとコウガは言い争い始めてしまった。

キツチンにいたイチカも気づいたが、火を扱っていたので動けなかつた
「ここではしないでくれる?」

その時、声がした方向を見た2人は扉の前に立つていたワサビ先生に気がついた
「先生」

扉の前にいたワサビ先生に、クウガとコウガの言い争いを止められた

「こんな所で内輪揉めしてる場合じゃないの、明日からのスケジュールを言い渡すわ
ワサビ先生は机を持ってきて、机にスケジュールが書かれたプリントを手渡した

「イチカ?」

「待つてください」

そう言つて、イチカはトレイの上にティーポットとコーヒーカップを持つてキツチン
から現れた

そして机に4人分のコーヒーカップを置き、そこにティーポットのお茶を注いでいく
「ごめんなさい、遅れました。どうぞ飲んでください」

イチカは笑顔で言つてプリントに目を向けた

「ありがとう、では明日からのスケジュールを伝えるわね」

そう言つて、ワサビ先生は明日からのスケジュールを言つていく、その中で三人は気になつた事があつた

「先生、これどういう意味?」

「先方からも、作戦を伝えたらこのように言われてね」

「意味はわかりますが、イチカが危険ではないでしょか?」

「わかっているわ、でも決定した事だから」

「ワサビ先生、大丈夫です。やれますよ」

「イチカ、無理だと思つたら直ぐに言いなさい」

「了解です、こういう事やつてみたかつたので」

そう言つて、イチカはカップを持ちお茶を飲んだ

そのスケジュールに書かれていたのが（イチカ 護衛対象の妻、クウガ コウガ 近

くから護衛対象を守備、ワサビ 護衛対象の家族）

そして次の日になり、イチカは昨日の服装とは違ひ護衛対象の妻を演じる為の衣装に変わつた

「今日から護衛の為に妻になります。イチカです」

イチカは机に座つて書類を読んでいる、シントウにお辞儀をした
「父から聞いている、私の為に済まない」

「いいえ、大丈夫です。決まつた事に兎や角言うつもりはありません」

イチカは笑顔でそう言つて、掃除を始めた

「そんな事はやらなくていいのだぞ」

「メイドとか執事は忙しそうですので、私がこの部屋をやつた方がいいかなって」
静止をされたが他の人達が、大変そうにしている中でイチカ一人が何もしないのが、嫌なのだと伝えた

その時の彼の顔は優しそうに微笑み

「やりたい事をやつたりいい、ただしこの書類には手を出さないでくれ」

そう言われて私は「はい」と返事した

一二三日同じ事をしていくシントウ様が口を開いた

「明日、夜にパーテイがある。その時に私の隣に居てくれるか？」

「大丈夫ですよ」

イチカは笑顔で答えた

「済まない」

シントウはイチカにお辞儀をした

「お辞儀なんて任務ですから」

そう言つて、掃除に入ろうとしたが時間などを見て、掃除をやめてお茶の用意をしよ

うと思つた

「少し休憩しましようか？」

シントウも時間を見てもうこんな時間かと感じた

「そうだな、メイドを呼んで茶を用意しよう」

「私が用意してきます。待つてください」

イチカは言つた後、部屋を出た

数分後、トレイの上にティーポットとコーヒーカップを持って入ってきた

「お待たせしました」

イチカは手際良くカップにお茶を入れてシントウ様の机に置いた

「お召し上がりください」

シントウはお茶を見た、薄い茶色をしたお茶だつた

「有難く頂こう」

そう言つて、口を着けた

「美味しいな」

(少し落ち着く香りと味がした)

それを聞いたイチカは

「喜んでもらえて嬉しいです。薬草を乾燥させた物と、茶葉と混ぜてティーバッグに入

れたものです。薬草には目の疲れや体力回復のものを使つてます。落ち着く感じだと
思います」

イチカは嬉しくてお茶の説明をした

それをシントウは少し頬を緩めて聞くそんな図形が出来ていたのだつた
そんな光景をコウガとクウガは見ていた

「楽しそうだなあ」

溜息をつきながら、暇な自分と照らし合わせて見ていた

「少しほ修行をしたらどうだ？」

「それもありか・・・」

クウガに言われてコウガも（そうだな）つと感じ体を動かした

その夜に作戦会議があり、イチカはお風呂を済ませた後、部屋に入つた

「ごめんね、3人ともこんな時間に」

ワサビ先生は謝りながら三人を見た

「大丈夫、大丈夫!!」

「支障はないので」

「私も大丈夫です」

三人は体の調子を言つた

「それじゃあ、明日の事話すよ」

ワサビ先生は資料を三人に手渡した

「明日はシントウ様の当主となる為のパーティが開かれるわ」

それに対して、イチカも喋りだした

「これに私もシントウ様について行きます」

今日あつた事を説明して、どこに配置するかを決めた

そして、パーティ当日

イチカはシントウと一緒にパーティ会場にいた

服装はドレスで綺麗に着飾つていた

ここにくるまでに、メイドさん方にあれやろれやと付け替え人形の様に、させられて
いたのは言うまでもない

シントウの腕に腕を組んで歩く、人との接する時になる時や挨拶になると、イチカも
一緒にお辞儀をする

目の前現れた、男の人とシントウ様が話し出した

「いやあ、あんなに小さかつたシントウ君が、ここまで大きくなるとわ」

「父上や他の者達のおかげですよ」

「そうですか、ではこちらの方わ？」

「妻のイチカです」

「イチカです、お見知り置きを」

イチカはドレスの腰の部分を少しあげ、腰を落としてお辞儀した
笑顔を忘れずに

「そうでしたか、いい妻を持ちましたなあ」

「はい」

少し、弾む話をしてからテントウ様の方へ向かつた

飲み物をとり、親子で話をしている時に私は飲み物を飲む、そして耳たぶの裏を指で
押した

「こちらに異常はありません」

「天井裏、異常無し」

「庭園異常なし」

「了解、引き続き警戒態勢でお願い」

「「「了解」」

時間が終わりに近づいていた所で

ワサビ先生は気づいた

「全員警戒態勢!!」

「「?」「!」」

イチカは直ぐにシントウ、テントウ様の近くに着いた
その瞬間、パーティ会場は霧に覆われた

「シントウ様、テントウ様!! 私の傍から離れないで」

イチカは拳を上げて臨戦態勢に入つた

すぐそこで何かが近く足音と共に攻撃が来たが
目の前でクウガにより止まつた

「クウガ!!」

「こいつの相手は俺がする お前は護衛対象を非難せし
せて いる

「分かつた」

そう言つて、イチカは2人を連れてパーティ会場から出ようとしたが、今度はシント

ウ様の後ろから攻撃が来た

それを拳で弾き飛ばした

「中々、やるな小姐」

「あなたは？」

そのやり取りをする前に、ワサビ先生が割つて入ってきた

「ビンゴブックに載つている人物に会えるとは思つてもいなかつたです」

笑顔でワサビ先生対応した

「俺を知つてゐるのか？」

「ええ、元水の国の人 畠幸 カンジ（とがらし カンジ）さん？」

「よく知つてゐるな」

言つた後、印を結び始めた

それを見た、ワサビ先生も印を結び始めた

印を結ぶついでと

「イチカ、あなたは護衛対象を早く」

「分かりました」

イチカは素早く避難誘導した

医療忍者

私はシントウ様とテントウ様を非難させた後、戻ろうとしたが

「イチカ、怪我人が多い手伝ってくれ」

コウガ君に止められて周りを見た

「分かった、今から私が手当していくから護衛お願い」

「分かった」

イチカは一様持つてきていた、医療器具セットと改良型医療セットを取り出した
そして、両指を2本立てて合わせた

「影分身の術」

イチカは術を使い、5人に別れた

「トリアージをお願い、重症や軽傷の人を確認をお願い」

「「「「分かった」」」

5人のイチカに指示を出した

「後、私が治療をするから何かあつた場合はその場の判断をお願い」

「「「「了解」」」

5人のイチカはトリアージの蓋を持ち怪我などの確認を始めた

「よし」

本体のイチカは医療緊急室を設置した

「これは？」

シントウ様は初めて見る物に興味を示した

「入らないでください、ここは怪我人以外を収容して私が治療する場所で」
そう言つて、イチカはマスクとゴム手袋を装着した

「入る場合はこれを付けてください」

イチカはシントウ様にマスクと手袋を渡した

（本体、軽傷です）

「分かった、お入りください」

傷口を見てガーゼと包帯を取り出して、消毒液を綿に湿らして傷口を消毒、そして
ガーゼ、包帯をした

「傷口を消毒しましたが、緊急手当なので明日にでも病院へ行つてください」

「ありがとうございます」

（次の人を入れます）

「分かった」

次々にイチカは治療をしていく

そばで見ていたシントウは目を見開いてイチカの行動を見た

(本体、重症者を居られます)

「どんな感じ?」

(子ども、10歳 ガラス片が足に刺さっています)

「了解、緊急オペするから全員帰つてきて」

((((了解))))

招集した影分身(イチカ)にマスクとゴム手袋、殺菌ウエアを着た

「同意は?」

(取つてます)

「了解」

(麻酔良好)

(器具、準備完了)

(血液パックセット完了)

(副官着きます)

「よし、私だけだけど緊急だから意思疎通大事に」

(((((了解))))

「これより、左足ガラス片の摘出手術を緊急オペ始めます」

シントウは外に出されて、見ることが出来なかつた。何が始まつて居るのかを直に見たいと思つたが影分身のイチカに阻まれてしまつた
「私も見学しても良いか?」

(ごめんなさい、シントウ様 ここからは医者の場所です)

「医療とは新たな発展が必要になりそうだな」

シントウはこの時の事で新たな事業の拡大である
医療忍者の導入を考えたのだつた

パーティ会場では戦いが激化していた

「火遁 蛍火」

周りの物に火を纏わせて放つた

「水遁 水陣壁」

周りを水で覆い火を消した

ワサビ先生は突つ込みクナイを持った

「やりますね、さすがピンゴブックに載るだけはあります」

「褒め言葉と取つておこう」

ワサビ先生はクナイを投げ、それを予期しカンジも投げた。
カンジは更に印を結び、目の前を見た

「水遁 水鮫弾の術」

鮫を象つた水の塊をワサビ先生に向かつて放つた

それを避けて手裏剣を投げた

投げてきた手裏剣をクナイで弾いた

ワサビ先生は目の前の敵をさらに集中して見た

(イチカは避難できたと過程してここからが本番)

ワサビは印を結び、フードを被つた

「忍法 猫かぶり」

ワサビ先生は獣と化した。ただ違うよが前の姿ではなく、尻尾が6本に増えていた

さらに印を結ぶ

「火遁 青龍火焰の術」

口を思いつきり吸い放つた

青い炎の龍が 咎辛 カンジを襲つた

後ろにさがり、印を結ぶ

「水遁 水龍弾の術」

周りの水を使い水の龍を出し対抗した
ワサビ先生はさらに印を結ぶ

周りが火と水の龍が相殺しあい煙が出た

「火遁 灰積焼」

口から高熱の灰周りに混ぜた

それに気づき後ろに下がる。奥歯に仕込んだ火打石の火花によつて着火させ、爆発させた

周りは爆発した

「まだよ」

さらに印を結ぶ

「火遁 炎竜巻」

爆発した火を使い、火の竜巻を出した

「やりをおる、水遁 水断波」

印を結んだ後、直線状の水圧カッターを口から放ち火の竜巻を切った

さらに印を結ぶ、2人の術比べが続くかと思われたが

「うが!」

咎辛 カンジ前に女が飛んできたのだった

「大丈夫か？ キト？」

「大丈夫 ただ、アイツ強い」

キトと呼ばれた女の方向を見ると

クウガが鎌を持って歩いてきた

「クウガ、大丈夫？」

「先生、大丈夫です。」

「先生さんよ、ここはお開きにさせてもらうぜ」

カンジはキトを背負い逃げようとした

「逃がすわけないでしょ」

「ここで逃げたところで捕まえるだけだ」

クウガとワサビは構え直す

「なら、耳寄りな情報だ」

カンジは今回の襲撃の事を話し始めた

「まあ何だ、お前らが庇つた中に真犯人がいるから」

手を前に出して降つた瞬間、煙が立ちカンジ諸共消えた

「ちつ、逃がした」

「まあいいわ、護衛対象を守れたのはいいことよ」

「分かりました」

ワサビ先生とクウガ、イチカ達の元に向かつた

「ふう」

イチカが手術が終わり、出てきた

近くにいた、母親らしき人とシントウが自分を見ていた

「大丈夫です、傷口を綺麗になるようにしちきました。」

「ありがとうございます」

「ただ、歩けるのに時間をかけます。安静にそして、リハビリをゆっくりとしていけばあの年なら早く良くなります。」

笑顔で対応して、左足に包帯を巻いた男の子が出てきた

「○○ちゃん大丈夫?」

「まだ麻酔が聞いてます。直ぐに病院に連れていきます」

来ていた、救急隊員に引渡しお母さんも一緒に行つた

「ふう」

ほとんどの怪我を対処して1時間経つていた

影分身を消した瞬間、一気に疲れを蓄積してしまい目眩がして倒れた時に

「大丈夫か？」

シントウ様に支えられた

「ごめんなさい」

そう言つて、私は気を失つた

真意

私が次に目を覚ましたが、1日経つた昼頃の事だった。起き上がり、頭を揺らして辺りを見た時に場所が把握出来たが、なぜ気失つてここに居るのか分からなかつた。寝起きで頭が回らない

「起きたか」

声がした方向を見ると、護衛対象のシントウ様がトレイを持つて現れたのだった
「私・・・・・」

「あまり起き上がるな、また倒れるぞ」

頭が冴えてきて、私がなぜここで寝て いるのかハツキリと思い出したのだ

「あの時倒れて」

「そうだ、ここまで運んできたのだ」

「ありがとうございます」

お辞儀をした時にシントウ様が私の額に手を当てた

「いや、よし熱はないな」

「え・・・」

「お前が倒れて、ここまで運んだ時に熱があつたのだ」

「すいません、体力やチャクラの使い過ぎで熱が出たのだと思います」

「そうか、ならば隊長さんに起きた事を伝えてくる。君は持つてきた食事を食べなさい」「ごめんなさい、ありがとうございます」

そう言つて、シントウ様はイチカのいる部屋から出て行つたのを見たイチカは、トレイに置いてあつた食事を口にする

「こういう事、昔はされたこと無かつたなあ」

イチカは自分が居た世界の事を思い出していた。

何も与えてくれない、ただあるのがいじめ、体罰、他にもいっぱいされた。辛い思い出、思い出すのも体が震える。やつと手に入れた居場所を守りたい。そう思つて忍者に医療忍者なつたのに

「こんな事でこんな有様だつたら誰も守れないなあ」

イチカはコップに入つてゐる。お茶を飲み小さく呟いた

「まだまだ、勉強しないと」

そう思いながらも、心の片隅には色んな物を拒絶している自分がいる。視線、目線がまだまだ怖くなる。温もりも悲しみに感じる時が少なからずある。怖い怖く心が突き刺す針のようなものが刺さる感じかあつて逃げ出したくなる。だけど母さんが居た

からここまで来れたと思つてゐる

(母さん、私できるかな)

少し怖氣付く、トレイを机に置いたあとベットで三角座りをして丸くなる。怖い怖いと心が叫び囁かれた時に扉が開く音がした。顔を上げ扉を見るとワサビ先生が立つていた

「ワサビ先生」

「イチカ!!」

走つてきて強く抱きしめられた。強く強く抱きしめられた

「よかつた、よかつた」

同じ言葉を繰り返しながらワサビ先生はイチカを抱きしめる。それに呼応してイチカも抱きしめた

「ワサビ先生、勝手な真似をしてしまいごめんなさい」

「いいんだよ、頑張ったね」

ワサビ先生は頭を撫でて優しくしてくれる。優しい先生で良かつたと思える。

「よし、今日はイチカはお休み。体を休めなさい」

「はい」

「あのの二人と私で何とか護衛するし明日からまたお願ひね」

「分かりました」

イチカは笑顔で答えて、ワサビ先生はイチカの頭を撫でてから出ていった。その後、コウガとクウガが見舞いがてら見に来た。今、護衛中に2人は修業を付けてもらつてゐるらしい。いいなあと思うものの体を治してからだと心で思つて1日空を見ていた。

そんな時に外で散歩でもと思い羽織を来て散歩に出かけた。森の中で鳥や川の音だけが聞こえてきて心が安らぐ気がした。その時、前を見た瞬間、昨日の襲撃犯が草を摘んでいた。

「あなたは!?」

先に声を出してしまい、気づかれてしまつた。

「お前さんは昨日のいい拳を持った子じやねえか」

イチカは構えたが、武器が無いため拳で戦うしかなかつた。

「構えんでいいよ、今回は薬草を摘見に来ただけだ」

「薬草つてそれただの草だよ」

「何!?」

交戦の意思がないと判断して、拳をさげた

「なんの薬草?」

「え?」

「一様、医療忍者だから。で、どんな薬草？」

「傷を治す為の薬草だ」

「なら」

イチカは歩いて辺りを見る。そして一本の木の下に咲く花を根っこから抜いて男に渡した

「薬草、傷に塗るものじやないけどすり鉢で花を潰す。汁が出てくると思うからそれを飲ませて、ただし強い薬草だから大量に飲ませないで、根っこは洗つて焼くなりしたら体力を回復させるものだから」

「ありがとな嬢ちゃん」

「一つ教えて」

花を渡した時にイチカが男を見て疑問をぶつけた

「なんで、襲撃するの？」

「依頼だからだ、俺は抜け忍だけども守りたい物の為に金を稼がないとダメなんだよ」

「抜け忍にならなくともお金は貰えるでしょ」

「それが殺害命令が出てた人であつてもか？」

「!」

「俺は命令を無視してその人と逃げる事にした。好きな人だからだ、守る為に抜け忍に

なつて何が悪い」

「そなんだ」

そう言つてイチカは後ろに向き歩き始めた。そして数歩歩いた後に
「今日の事は忘れる。でも次会つたら倒すから」

男がどんな顔をしていたのか知らないけど、今の私にやれるのはここまでだと思つた
のだった。そしてゆっくりと歩きながら散歩していた時

「ここに居たのか」

「シントウ様」

息を切らして私の前に現れたのがシントウ様だった。私の手を掴み歩き始めた

「病人が外に出るな」

「ごめんなさい、でも森を歩いたらだいぶん良くなりました」

「それでも、今日一日休めと言われているのだろう」

「はい……」

休んでいた室内に戻りベットに座られた。そのシントウ様も私の横に座り手を握
りしめられている。暖かく大きい手だと思つたが口にしない、すれば恥ずかしくなるか
らだ

「何故、医療忍者になつたのだ？」

「え・・・」

「医療忍者になろうと思ったのだ」
「母が医療忍者だつたからです。何も取り柄のなかつた私に未来を教えてくれたんで
す」

「・・・・・」

「まだまだ半人前だけど立派な医療忍者になつて守りたいんです。人を」

シントウ様の方に向き笑顔で答えた。それを見たシントウ様は顔を近づけて行きイ
チカの唇と唇を合わせた。それをイチカは最初に何をされたのか分からなかつた。そ
の後、唇を離して親指でイチカの唇をなぞる様にして触つた。本当に何がなんだかわか
らなくなつてしまつた

「お前の夢が叶うといいな、私はお前の夢を心より願つている」

シントウ様は笑顔で答えた後、立ち上がり扉の方に歩いていつた

「待つてください。今のは」

慌ててイチカは立ち上がりシントウ様の方に歩めよつて歩くのを止めた

「この一週間お前と一緒にいて気付いたんだ。私の傍にお前がいる。笑つて頑張つてる
お前がいる、見ていて落ち着くと感じたんだ。そして気づいたのだ、お前の事が好きだ
と思つた。一人の女性として」

「分からぬ、わからぬです。私にはその感情がわからぬです」

イチカは溢れる涙を流しながら言つた。シントウ様が抱いている感情が私には分からなかつた。初めての感情「好き」という感情は分からぬ。だつてずっと痛いと孤独と悲しみしか知らなかつた私にそんな感情は初めてだつたのだ。涙が溢れてそれを拭う左右の手で拭う。その時、私を暖かく抱きしめてくれた。

「大丈夫だ、私にとつて淡い感情、言葉だ」

「違う、違う」

イチカは言葉にしようと頑張るが出てくる言葉がなく泣く事しか出来なかつた。それをわかっているのかシントウ様は私を暖かく抱きしめて泣き止むのを待つてくれた「ありがとうございます」

泣き止むと残つた涙を拭いお礼を言つた

「気にすることではない」

「あの・・・私がその言葉・・・感情が分かるまで待つてもらつてもいいですか」

「待つ、大丈夫」

笑顔で答えた。そしてゆっくりと抱きしめるのを解いてシントウ様は扉から出て

いったのだった

「私・・・・どうしたらいい?」

そう言つてイチカは首飾りを触つて言つたのだった